

高知県南国市

中世城館跡

高知県南国市教育委員会

序 文

昭和58年度高知県教育委員会は、県下一斉に中世城館跡の調査を行いましたが、これによって南国市には47の城館が確認されました。しかしこの中には、開発や宅地造成のために消滅に瀕しているものも多く、記録の確認をしがたいものもあり、今にしてこれを集録し次代に伝えることなくば、と痛感し、昭和59年度文化財保護事業の一つとして、纏めることにしました。しかし市内にはまだまだ調査洩れがあると思いますし、「土居」の小字が残っていても現況にはその跡が見られず、旧い記録があつて現在場所不明なものもあり、この調査から削除しました。これなどは今後の調査に待ちたいと考えます。

本調査に当たりましては、高知県教育委員会文化振興課社会教育主事宅間一之先生には、実測から記録の整理に至るまで、長期に亘り日夜献身的なご指導とご援助をいただきました。ここに心から感謝申し上げます。

その間南国市文化財審議委員各位をはじめ、各地域の多くの方々のご支援ご協力をいただきました。併せてお礼を申しあげます。

本書が城跡に関心をもたれる向学の方々の将来の研究資料に役立つことが出来れば、まさに幸と存じます。

昭和60年3月30日

南国市教育長 鈴江廣幸

例　　言

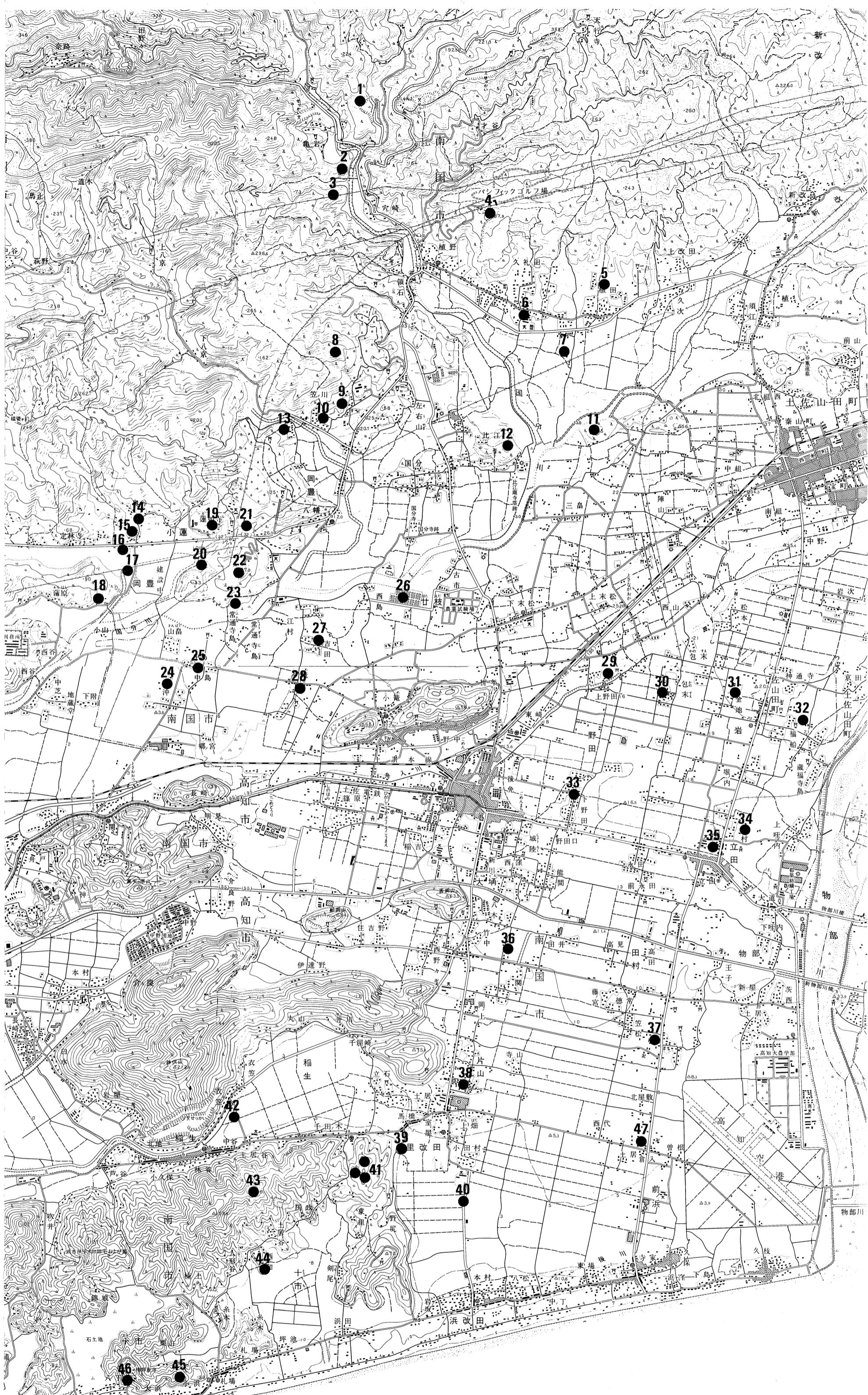
1. 本書は南国市教育委員会が実施した南国市に所在する中世城館跡分布調査の報告書である。
2. 調査は、昭和58年12月から昭和59年3月にかけて実施され、踏査によってその所在を確認し、現況を把握することにつとめた。
3. 本書は中世城館跡の残存状況を計測し略測図の作成と現況の報告及び記録、伝承も可能な限り記述した。また千屋城跡については、昭和58年8月実施された緊急発掘調査の報告書を転載した。
4. 本書に使用した地形図は1:2500高知広域都市圏図を2分の1に縮尺して使用した。方位は上方が北を示す。略測図は踏査時に巻尺によって計測した数値に従って図示したものであり、部分によっては地形的に若干異っている地点が存在する。但し一部実測図の存在するものについてはそれを使用した。また小字図は『南国市史資料・地区別小字図集』を使用した。
5. 位置については、国土地理院2万5千分の1地形図の北西隅部と、南西隅部からの距離を記した。
6. 本書に使用している数字は概数である。
7. 中世城館については、その城名や郭等の名称について文献上明確にすることは困難であった。本書も城名や郭等の呼称については、通称のもの、便宜的に使用されているものをそのまま使用した。
8. 本書の執筆は、城館跡遺構の現況は宅間一之（高知県教育委員会文化振興課社会教育主事）があたり、歴史、伝承について武田勝（南国市文化財審議会委員）があたった。写真及び編集は、南国市教育委員会の久家豊一、浜田清貴、沢田一彦があたった。
9. 本書の作成にあたっては、南国市文化財審議会委員はじめ多くの人々の御指導、御協力をいただいた。特に岡豊地区の現地踏査並に歴史、伝承については田中哲雄氏（南国市文化財審議会委員）の協力も得た。

調査協力者

坂本淳夫・本川正直・吉本忠重・野口賢・葛目武雄・春田正敏・島崎洸一・窪田昭夫・宇賀和彦・土居菊雄・飯田淑子・前田楠亀・山本豊喜

目 次

序		26. 廣井土居城	67
例 言		27. 吉田土居城	70
1. 亀ヶ森城	1	28. 小籠土居	74
2. 坂本城	3	29. 上野田土居城	75
3. 亀岩城	6	30. 包末土居城	79
4. 久礼田城	9	31. 包地土居城	82
5. 植田土居城	14	32. 岩村土居城	83
6. 中ノ土居	17	33. 野田土居城	89
7. 沖ノ土居	18	34. 立田土居城	93
8. 新 城	21	35. 徳弘土居城	93
9. 豊永土居	27	36. 八木土居城	96
10. 池尻古城	30	37. 田村土居城	98
11. 三畠城	32	38. 片山土居城	113
12. 比江山城	33	39. 里改田土居	115
13. 西村土居	40	40. 蚊居田土居城	118
14. 小野土居	41	41. 三ツ城	121
15. 小野古城	41	42. 下田土居	125
16. 千頭屋敷	44	43. 鮫の森城	127
17. 窪添屋敷	44	44. 中ノ城	132
18. 蒲原屋敷	44	45. 栗山城	134
19. 石谷土居	47	46. 細川土居	139
20. 下野土居	47	47. 千屋城	141
21. 谷 土 居	49		
22. 岡 豊 城	50		
23. 桑名屋敷	63		
24. 中内土居	63		
25. 中島土居	63		



- | | | | | |
|----------|----------|------------|------------|----------|
| 1. 龜ヶ森城 | 11. 三畠城 | 21. 谷土居 | 31. 包地土居城 | 41. 三ツ城 |
| 2. 坂本城 | 12. 比江山城 | 22. 岡豊城 | 32. 岩村土居城 | 42. 下田土居 |
| 3. 亀岩城 | 13. 西村土居 | 23. 桑名屋敷 | 33. 野田土居城 | 43. 蛭の森城 |
| 4. 久礼田城 | 14. 小野土居 | 24. 中内土居 | 34. 立田土居城 | 44. 中ノ城 |
| 5. 植田土居城 | 15. 小野古城 | 25. 中島土居 | 35. 徳弘土居城 | 45. 栗山城 |
| 6. 中ノ土居 | 16. 千頭屋敷 | 26. 廣井土居城 | 36. 八木土居城 | 46. 細川土居 |
| 7. 沖ノ土居 | 17. 窪添屋敷 | 27. 吉田土居城 | 37. 田村土居城 | 47. 千屋城 |
| 8. 新城 | 18. 蒲原屋敷 | 28. 小籠土居 | 38. 片山土居城 | |
| 9. 豊永土居 | 19. 石谷土居 | 29. 上野田土居城 | 39. 里改田土居 | |
| 10. 池尻古城 | 20. 下野土居 | 30. 包末土居城 | 40. 蚊居田土居城 | |

1. 龜ヶ森城

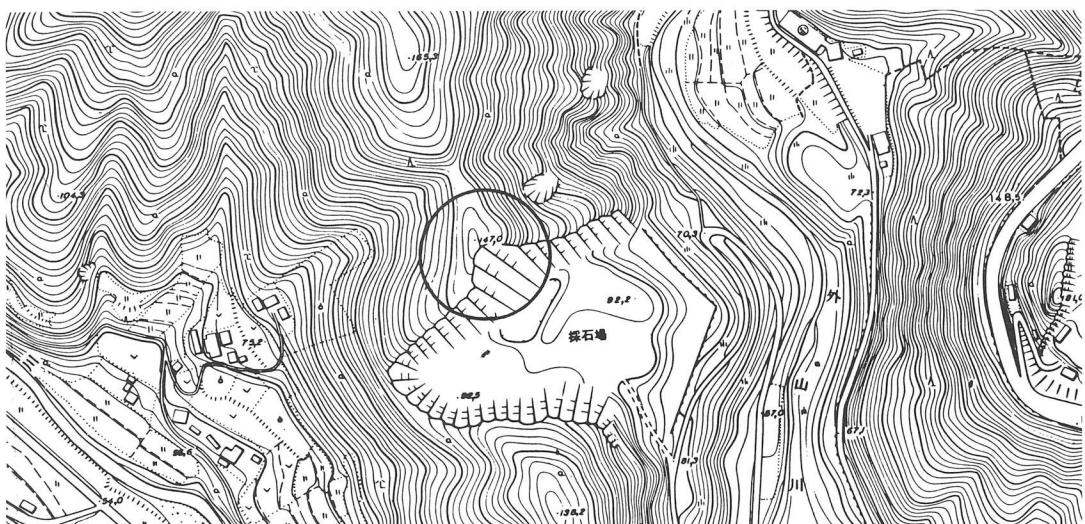
亀岩亀ヶ森 土佐山田 16.1×21.9

亀岩石灰採石場西方の山頂であったが、昭和48年頃石灰石採石のため完全に消滅した城である。南800mには坂本城がある。

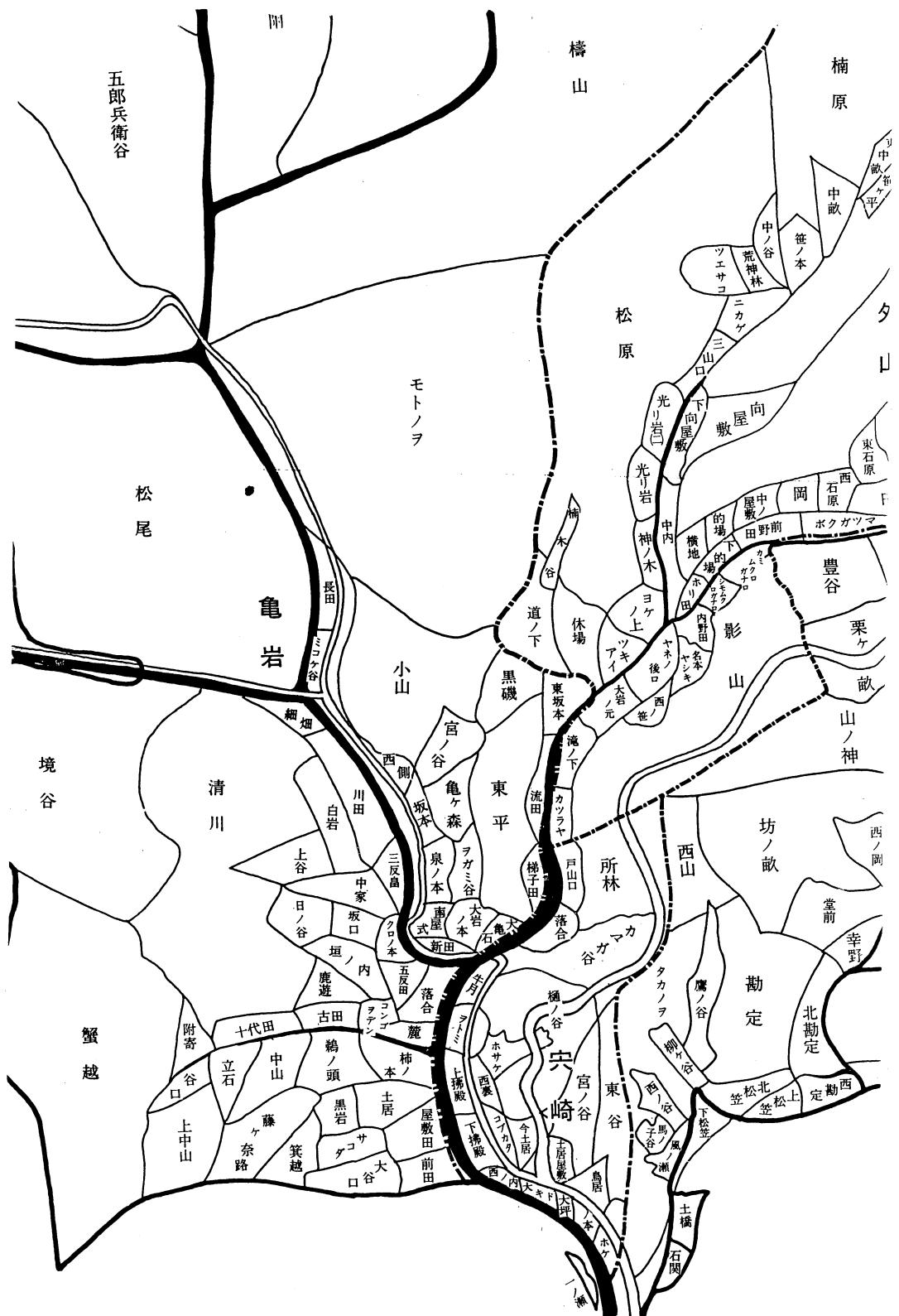
築城者は不明であるが『土佐国古城略史』に「城主、豊永弥九郎、案するに世系詳かならず」とある。戦国時代は豊永氏の勢力下であったがのち長宗我部氏に降った。

山麓の「泉ノ本」には昔から城の井戸跡といわれるところがあり、現在も泉がある。近くに鍛冶屋敷と今も呼んでいる土地があるという。城主が鍛冶屋を入れて手工業を行っていたものであろうか。

本山氏の命で豊永弥九郎の築城ではなかろうか。(坂本淳夫・本川正直氏談)



城跡所在地周辺（城跡は削平され存在せず）



2. 坂本城

亀岩落合 土佐山田 18.5×19.1

標高80mの山頂先端部で、現状は畠と山林である。東西幅100m前後の谷に所在する城跡で、北に亀岩の集落を隔て亀ヶ森城跡、南には亀岩城、東は亀岩川が宍崎から領石へと流れている。

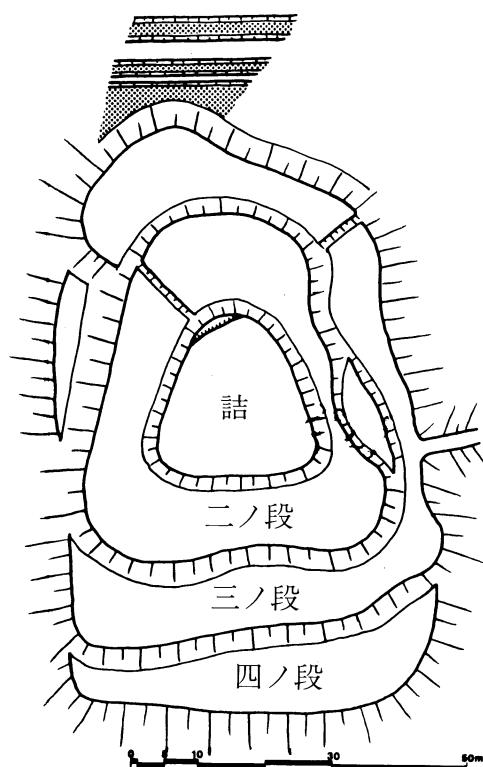
詰は北を頂点とする三角形状地形で南北24m、南端の東西は16m程度である。北西部には高さ1mの壘状地形が長さ7mほど残存するほか完全な平坦地である。

二の段は詰より3~3.5m低く、幅は東部が3.5m、他は7~9mの広さをもって詰を一周し、北西部壘状地形の下方で1.2mの高低差をもって接合する。

二の段と3~4mの比高で南から東、北へと三の段が帯状に所在する。幅は南で7m、東部では一部3mと狭いところもあるが北へかけては再び7mと広がる。更に南5m下方には東西59mにわたって四の段がある。幅は西部で5m、東部では7mである。

堀切は西に1条、北に3条、豊堀は東面に1条ある。西の堀切は現在道路として利用されている最大のもので、西方からの尾根続きを完全に遮断する。北方の3条は三の段北下方にあり、三の段直下が最大で底幅2m、深さ3mで他のものは1.5m程度の深さのものである。東斜面の豊堀は幅2m、長さ5m程度の小規模なものである。

詰や各段は畠として利用されており、多少の整地は考えられるが城構は比較的良好な残存状況である。



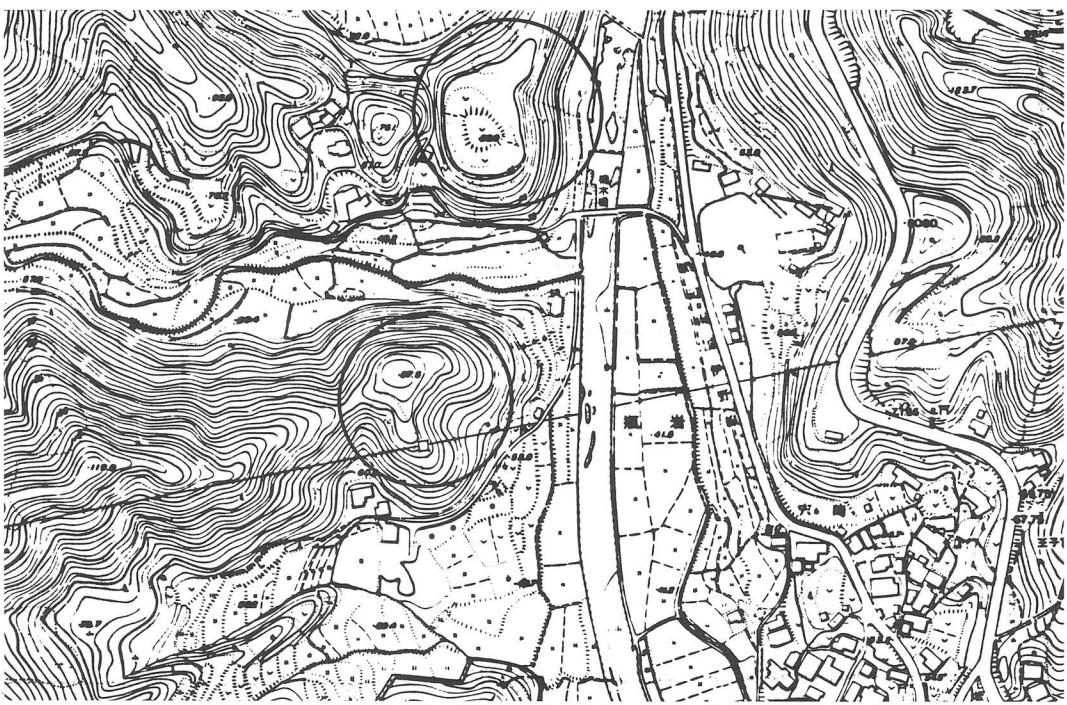
築城者は不明であるが『土佐国古城略史』に「城主、坂本喜三兵衛。後、秦氏の時、中島源兵衛之に居る。坂本、中島の二氏の世系未だ考えず。」とあり、亀ヶ森城主豊永氏と対照しており、虎視眈々と豊永氏をうかがっていたが、のち共に長宗我部氏に属する。

『地検帳』には

古城 枕ノママ
1、壹反十代壹分 段々四切 下ヤシキ

主ある
坂本喜
三兵衛給

となり、古城となって坂本喜三兵衛の居ヤシキとなる。



上一坂本城 下一龜岩城



城跡と周辺（南東より）



詰（西南より）



三ノ段堀切（南より）

3. 龜 岩 城

亀岩土居 土佐山田 19.4×18.1

坂本城とは700mの距離にあり、谷一つ隔てた位置である。現状は山林と一部栗林の山頂であり、詰部分の平坦面は東西20m、南北15mのほぼ円形である。二の段は詰を巻いているが地形は変形で西方がやや舌状にふくらみ最大幅で5m、南もやはり出して幅は10mである。そこから東は7.5m幅で北にかけては次第に幅を狭めつつ北西部分で消滅する。

北斜面には二の段より5m低いところに、幅5mの帯状で北の段が所在する。東西両端はそれぞれ堀切で仕切られそれ以下は急傾斜で北の谷に至っている。

東斜面は東堀切Ⅰを隔て東三の段と四の段の二つの郭がある。東三の段は幅8mで東方へ18mはりだした舌状の郭でやや西よりには堀切Ⅱも存在する。その下方3mの四の段は南北25mで東方へ5mはりだした郭である。

南斜面は、二の段が南へ10mはりだした先端部の南堀切を隔て三段にわたる郭状地形がある。南堀切に接する南三の段及び四の段は、鉄塔が立ちその工事に伴いかなりの削平は考えられるが、南三の段が14m、南四の段が21mそれぞれ南へ伸びた舌状の郭である。更にその先端部より4m下方には小規模な帯状の平坦な南五の段がある。この段は南四の段の西から南そして東へ40mにわたって巻いており、その先端部には高さ1mほどの壘状地形がある。

堀切は東に2条、南に1条、西に3条、豎堀は南東斜面に2条存在する。東堀切は二の段と東三の段を画する形で存在し、上幅5m、底幅1.5m、深さ1～2mで、北斜面の北の段の東端を堀切って豎堀となって30mほど下方に及んでいる。また南へは小規模な窪地となって残存し、東南斜面に存在する二条の豎堀や南堀切と合して自然の谷を利した大規模な豎堀となって下方麓まで至っている。但しこれらの堀切や豎堀の合する地点より下方は近年の崩壊によって著しく地形は変化している。

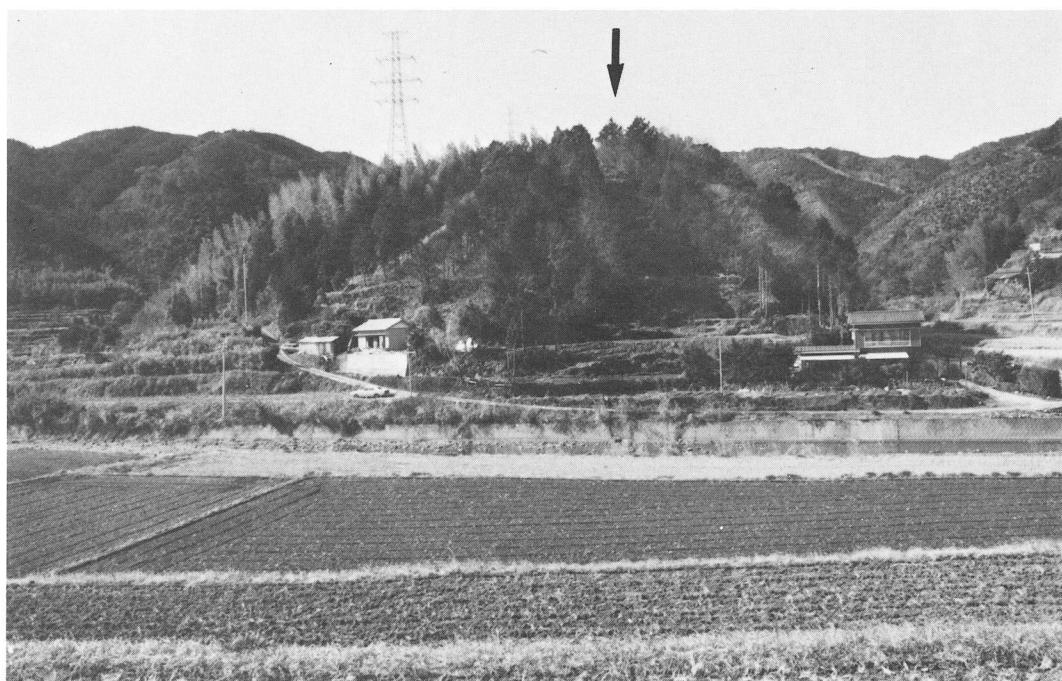
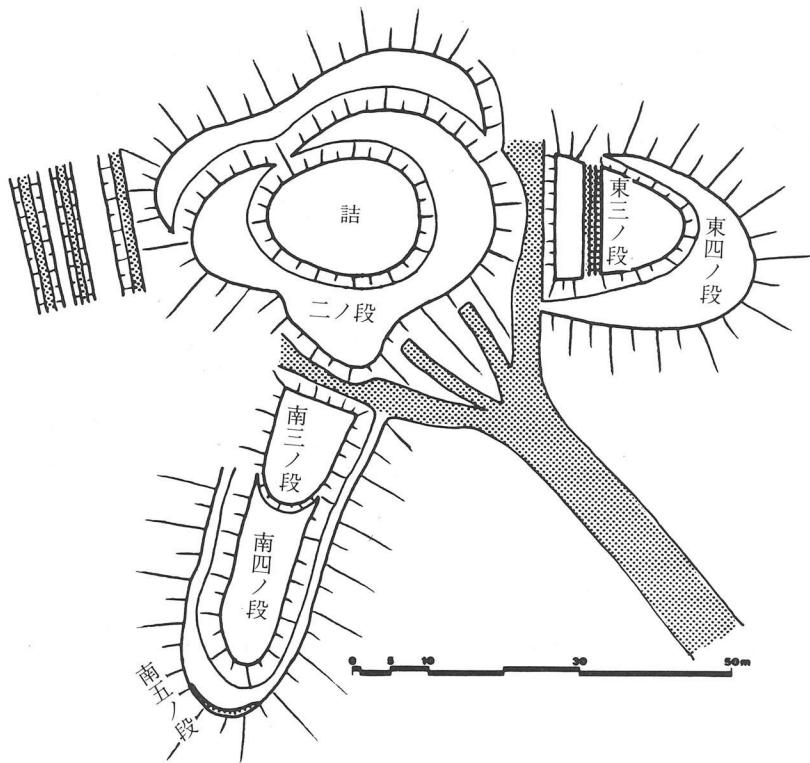
南堀切は二の段と南三の段を画して上幅5.5m、底幅1.5m、深さは二の段側が3.5m、南三の段側で2.5mと大規模な堀切である。

西堀切は二の段と西方尾根との間を画するもので、二の段の切削部より西方への15.5m区間に3条にわたって存在する。上幅は二の段側からそれぞれ3.5m、2.5m、4mで、底幅及び深さは1～1.5mである。それぞれの堀切間は畝型で良好な遺構として残存する。

南東斜面の豎堀は小規模でありわずかな窪地となっているが、これは東堀切と南堀切間の斜面に畝型の阻障として構えたものであったかも知れない。流土による埋没が多分に考えられる遺構である。

『土佐州郡志』に「名_二土居_一不_レ知_二何人所_一城_レ」とある。『地検帳』によれば、郷原右衛門

の土居城となる。



城跡と周辺（南東より）



詰北東面（東より）



堀切III（南より）

4. 久礼田城

久礼田中山田 土佐山田 20.0×19.4

パシフィックゴルフ場入口南の標高67.9mの山頂である。北には四国山地が屏風のようにたち、南には広い香長平野が開ける。眼下には中ノ土居、沖ノ土居があり、三畠城、比江山城も一望できる。

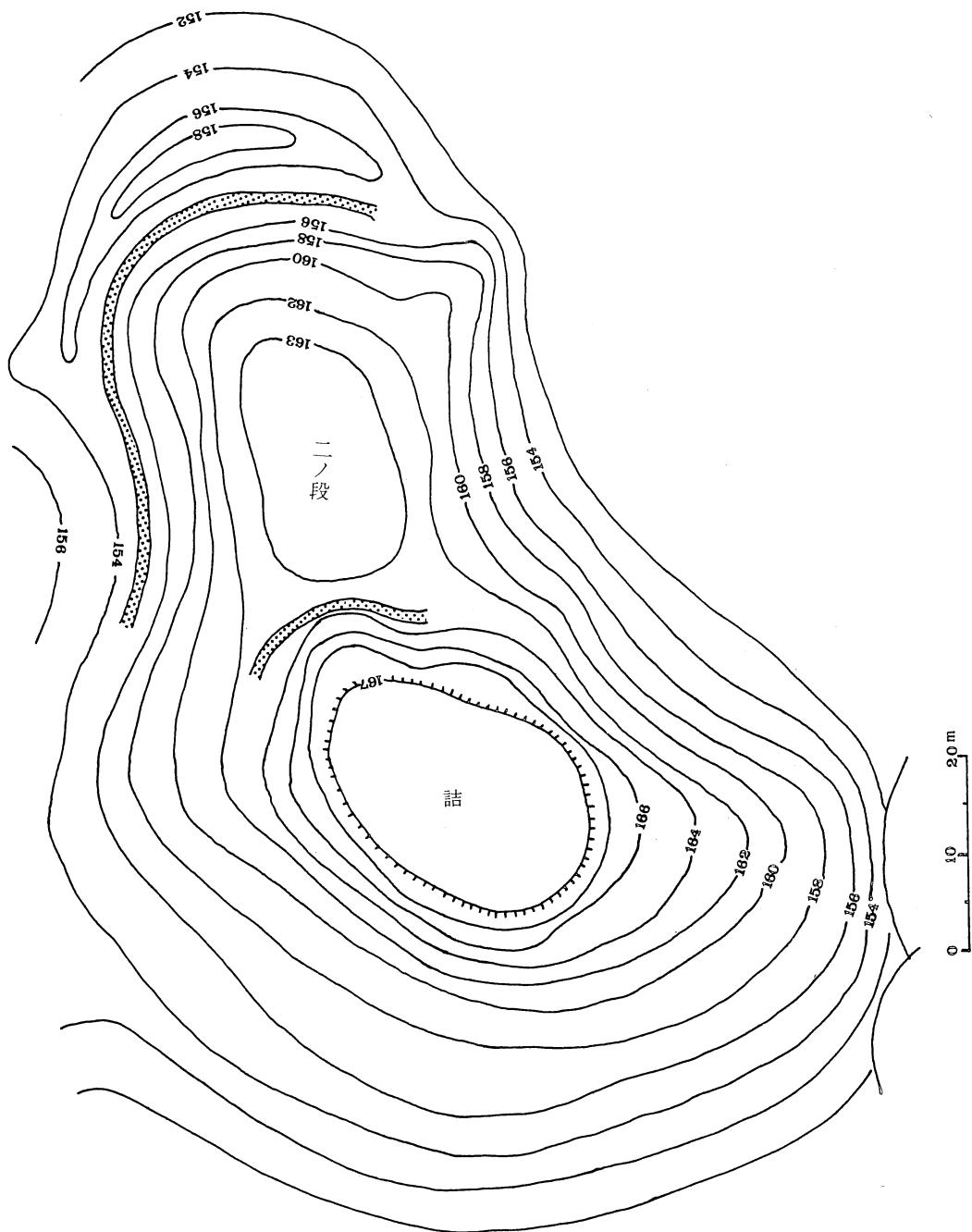
詰は東西25m、南北30mのやや椿円状地形で周囲には土壘が残存する。この土壘は北東隅から西へ10m、南へ15m部分が、高さ1.5~1.8mで良好な遺構として残存する。しかし他の部分においても50cm内外の盛り土状に残存し遺構としては十分なものである。

二の段は詰の東北下方で、詰の平坦面とのレベル差は3.5mである。東西20m、南北12mの椿円状地形で、北辺には東西方向で高さ1~1.2mの壘状地形が僅かに残る。

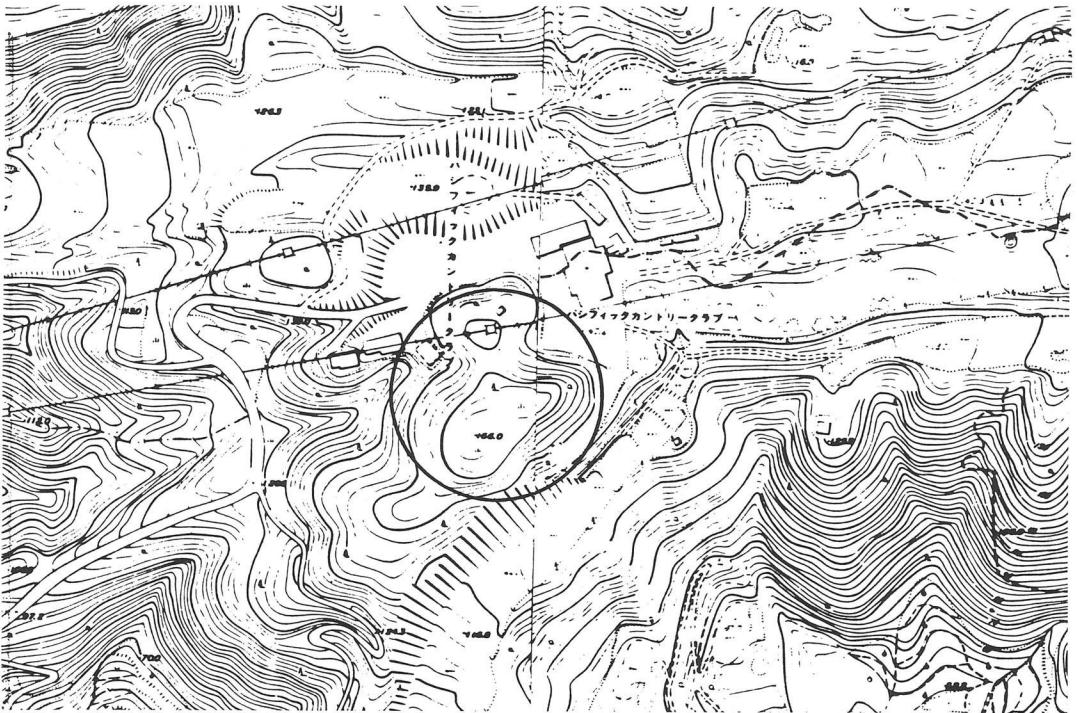
堀切は詰と二の段を画して1条、そして二の段の下方に1条の空堀がある。二の段西端の堀切は上幅4m、下幅1.5m深さ1mの規模で詰の東部下方から北にかけて20mほどのびている。二の段下方の空堀は上幅10m、下幅2m、深さ5m内外のもので、二の段東下方より二の段の北部をまわって詰北下方まで60~70mのびている。

周辺はゴルフ場として開発されているため、中世城跡としての景観は失なわれているが、詰を中心とした城跡遺構は比較的整備され保存されている。

城主は久礼田氏・甫喜山氏とされる。秦氏三代忠俊の弟忠幸が久礼田を名乗ったのが久礼田城主のはじまりといわれる。その後の状況はほとんど知られていないが、南北朝時代に久礼田氏は武家方として長宗我部の分流の一族と共に戦った。戦国時代には本山氏の南進をはばむ重要な役割をもっていたと思われる。しばらくして城主に新左衛門という者がおり、新改の甫喜山城に移り甫喜山新左衛門と号した。後に新左衛門は滅亡、その妻は身重の体であったがのがれて流浪の旅をつづけ江戸に出た。そして丸橋回龍の妻となり、丸橋忠弥を生んだという。



久礼田城跡実測図（島田豊寿原図）



城跡全景（南より）



詰全景（南東より）



詰東土墨（南西より）



二ノ段下の堀切（南東より）

久礼田地区



5. 植田土居城

植田二ノ堀 土佐山田 25.8×20.6

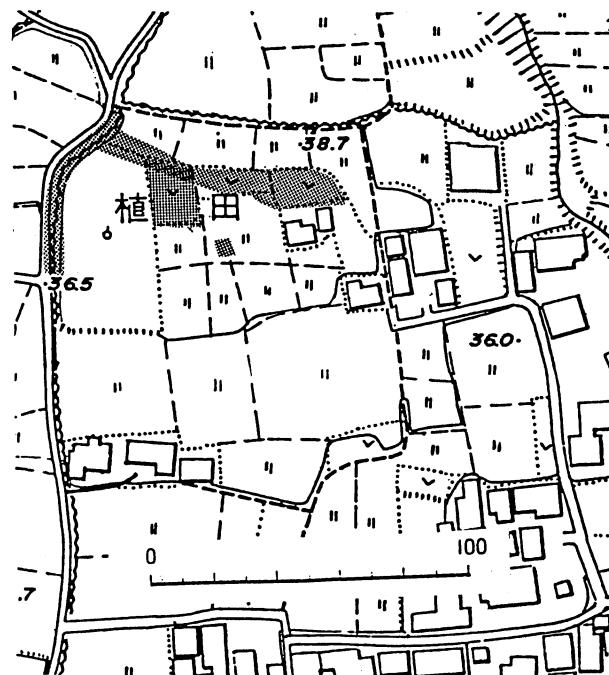
久礼田小学校の北東約1kmに所在し、標高36~39mの植田峰の南麓部分で、現状は水田や畑、宅地などになっている。

土居の遺構と断定できるものは何も存在しないが、その北辺部土壠ではないかと考えられる壠状地形が東西方向に70mにわたって存在する。基底幅は10m程度である。またこの壠状地形の西端部から南へ20~25mにわたっての壠状地形も存在するが土居との関連は不明である。なお壠上には竹が生い茂っている。

周辺には「二ノ堀」「八頭」などのホノギもあり、北西1.2kmには久礼田城、南西900mには中の土居や沖ノ土居もある。

城主は比江掃部助親興。『地検帳』によれば、植田本土居は比江山掃部給、となり隣接した門田土居は戸波右兵衛尉より掃部助へ配分となっている。検地の段階では比江の古城（比江山城）を去り、植田本村に兄右兵衛尉の給地の配分をうけている。

比江山掃部助親興は長宗我部元親の世継問題で諫死したが、この時夫人と子供2人は従者と共に須江の善勝寺へ逃れた。このことを植田の百姓が追手の者に告げたため、とらえられて須江の川原で殺された。その後いろいろ不思議なことが起り、比江山の7人みさきの祟りであると人々に恐れられた有名な話があるが、親興一家は自分の領地内の者に裏切られたことになる。夫人们の行方を教えた植田の百姓の家には代々に祟りがあると言われるが、本当かも知れない。（田中菅雄氏談）





北墨状地形（東より）



北墨状地形（西より）



植田土居周辺（南より）

6. 中ノ土居

久礼田中ノ土居 土佐山田 25.9×16.9

久礼田小学校に北接する地区で、標高26~27mの民家が密集した地域である。民家の間に、小規模な壠状地形の残丘も各所に所在するが、土居との関連は全く不明である。北1キロの山上には久礼田城、南東500mには沖ノ土居、北東900mには植田土居などがある。

久礼田城の山下居館であり久礼田御所ともいわれている。

幡多の一条兼定（4代）は渡川合戦で大敗し、のがれて宇和島沖の戸島に隠棲して彼の地で果てた。^{ただまさ}その子内政は大津城に移され、元親の女をめとてここにいた。天正8年（1580年）波川玄蕃の謀叛にくみしたため大津城を追わされて幡多で死んだ。元親は内政の一子政親と母（元親の女）を久礼田に迎えた。久礼田氏が政親を養育したことは名高い。（政親は久礼田御所といわれた）時に天正8年（1580年）の頃で久礼田定祐の時代であったといわれる。慶長5年（1600年）長宗我部氏滅亡後、たちよるかけもなく京都へ去ったという。



7. 沖ノ土居

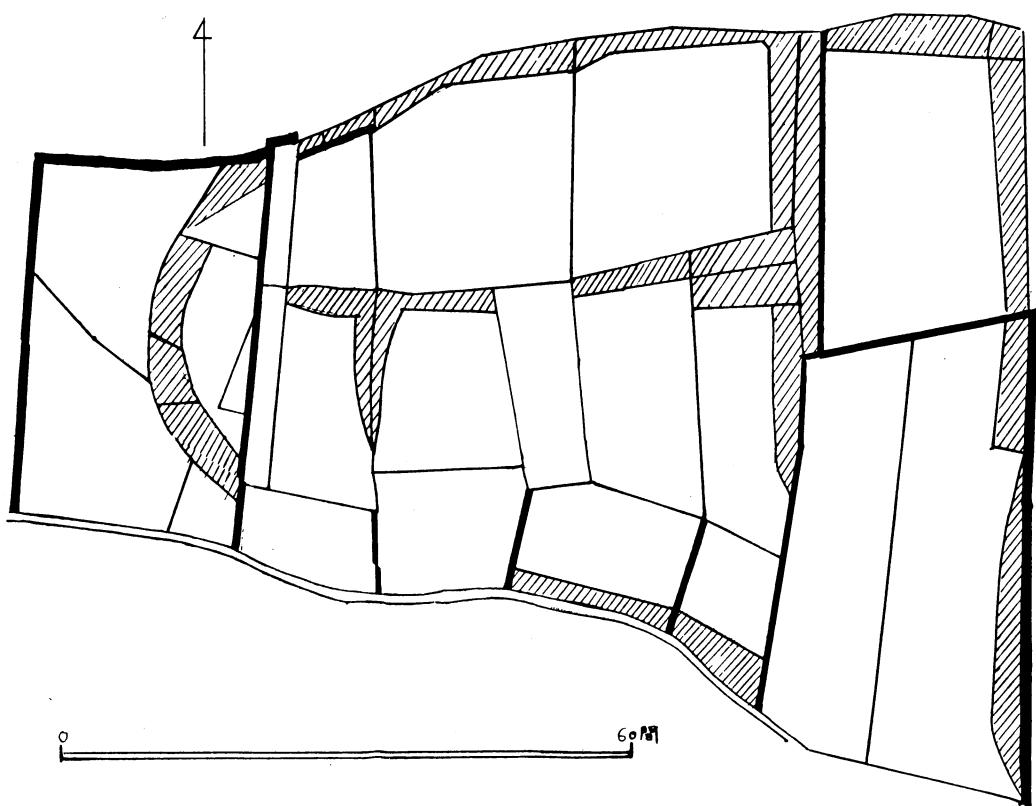
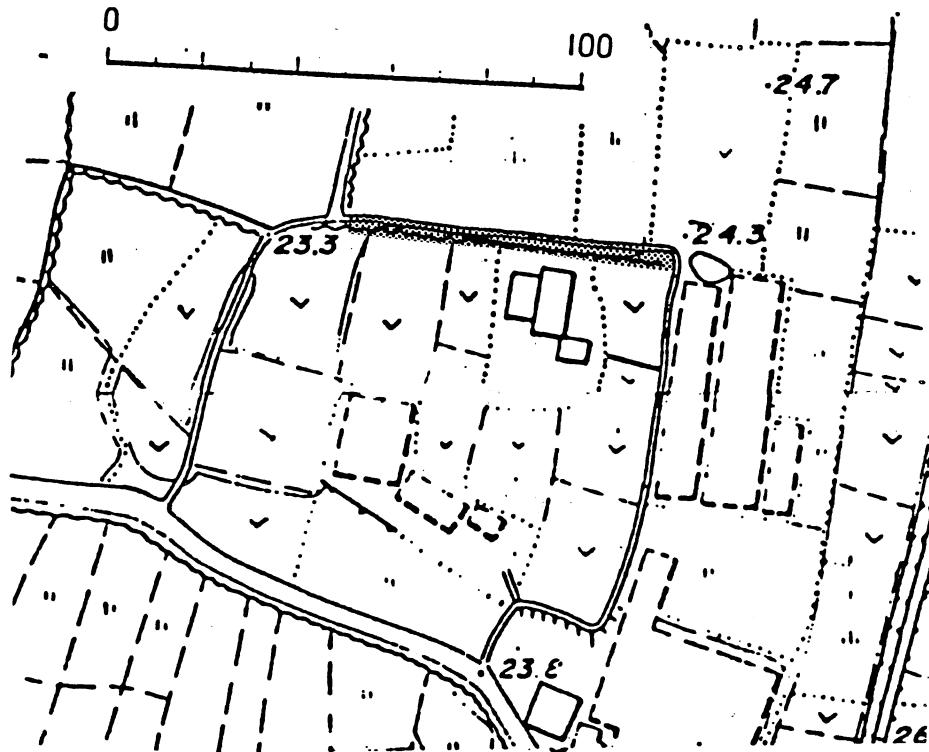
久礼田沖ノ土居 土佐山田 27.7×17.2

久礼田小学校南東約500mの地点であり、標高23~24mの水田である。土居北端部と推考される地点には東西70mにわたって壠状地形があり、周辺一部には狭長地割の水田もあるが土居との関連やその復原には資料不足である。

北東900mには植田土居、北西500mには中ノ土居、そして南西1kmには比江山城、南800mには三畠城もある。

『地検帳』によれば、廣井三郎衛門尉の給地であり、廣井神内の扣地となっている。廣井三郎衛門尉は、久礼田に多くの給地をもっている。





沖ノ土居地割図（島田豊寿原図）



土居周辺



北壘状地形（北より）

8. 岡豊新城

岡豊笠ノ川新城 土佐山田 25.2×12.3

標高189mの山頂に所在する山城で、そこからの眺望はよく、国分・香長平野から太平洋まで一望できる。自然の長い尾根上に詰や郭が続いている。

詰は東西55m、南北15mの長楕円形で東西両端はかなり尖っている。西端より35m東方で50~70cm低くややくの字状にまがった地形である。西部には南から西にかけて壠状地形が残り、東部にも南から東、さらに北へとほぼ50cm内外の高さをもった壠状地形をみることができる。

堀切は詰の東西両端にあり、西堀切は深さ3~4m、底幅4~5mで21mの長さにわたる堀切である。東堀切は詰と最深部とのレベル差6mで東の段とは1.6mの差である。上幅は4m、底幅1.5mで堀切の長さは14~15mにおよんでいる。

この堀切を隔て東二の段がある。この郭は東西2つの郭からなり、両郭は3m程度の折れ曲った通路によって結ばれている。西方の郭は東西11m、南北13mの方形の平坦部であり、南、北、東の三面に土壠がある。高さは南は30~50cm、北は50~70cm、東は1m程度である。この郭の南西隅部には2.7~3m幅の通路が開き東方の郭へ通じている。この通路は、西方の郭から一たん東に出て、ほぼ直角に北に折れて6m、そこから再び東に折れて11mの地点に東方の郭が開ける。この東にむかう11m区間の南側は1mほどの壠状地形となりそのまま南斜面に下っている。また西方の郭の出口南斜面には人頭大の石を1mほど積み上げて自然地形を南にはり出し平坦部を作ると同時に南斜面への通路の崩壊を防いでいる。

東方の郭は東西22mで南北最大幅22mの卵形の地形である。南側全面にわたって1~1.5mの土壠があり、東南隅が東三の段への降り口として1.5m幅開いている。土壠はここから更に北方へ30~50cmの高さでまわっている。

東三の段は二の段とは4~5m差でその間は岩盤が露呈し絶壁となっている。二の段側の裾南北は14m、東西は16mのやや角ばった広さをもつ舌状の平坦地形で、北辺全面から北東隅にかけて50~70cmの土壠基盤状遺構も存在する。

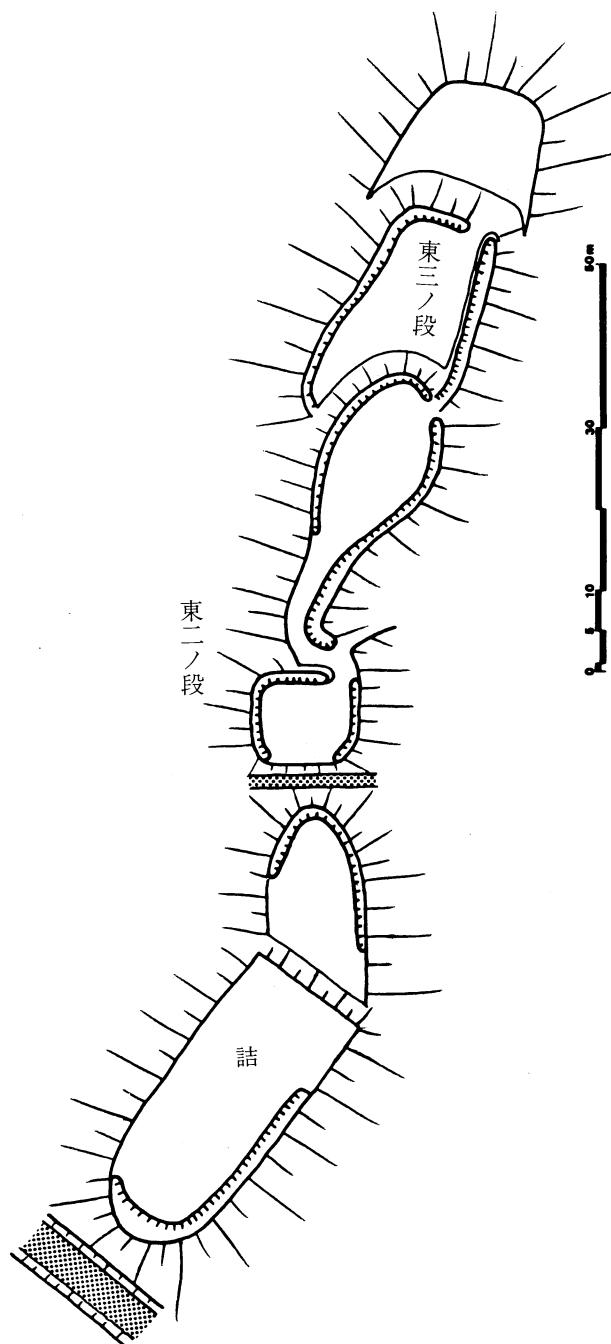
この郭より東は一担急峻な傾斜を経てさらに下方の舌状平坦面につながるが、その平坦地と城跡の関係把握は困難である。また詰の西方にも尾根を3~4mほど堀りこみ、各所に低い石垣やら削平地形も存在するが、これらのものについても城跡との関係は不明である。ただ数片の近代の瓦片の散在は、新しい時期の工事とも考えられる。

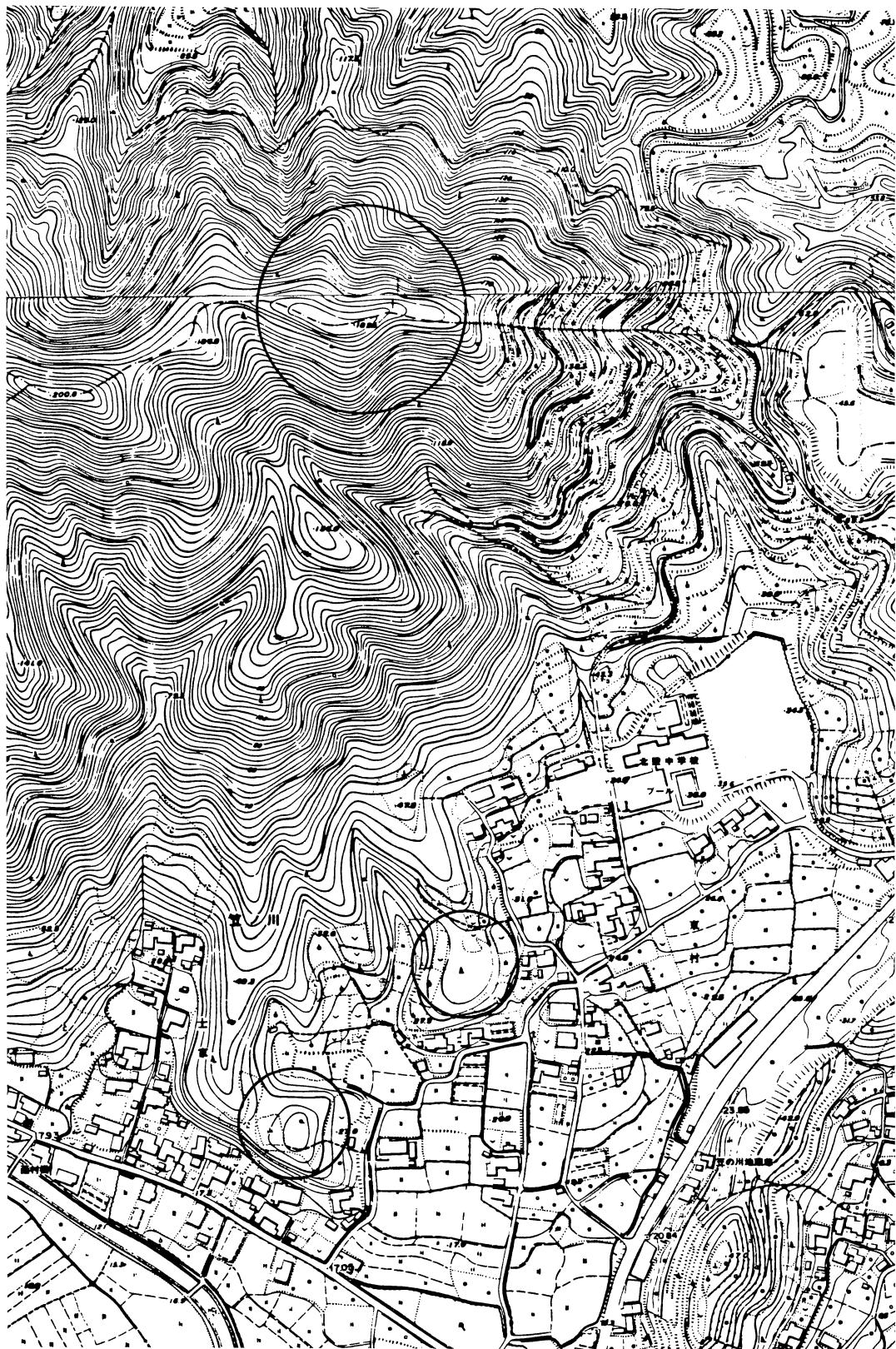
南下方600mには池尻古城が、また500mには豊永土居がある。

『土佐州郡志』に

相传昔豊永藤五郎砦也 是視南海異国船来之処 云今成松林禁撫採
とある。

豊永藤五郎は元親の有力下臣で16世紀後半に中五郡の奉行として、役給22町歩を給せられていた。（田中菅雄氏談）

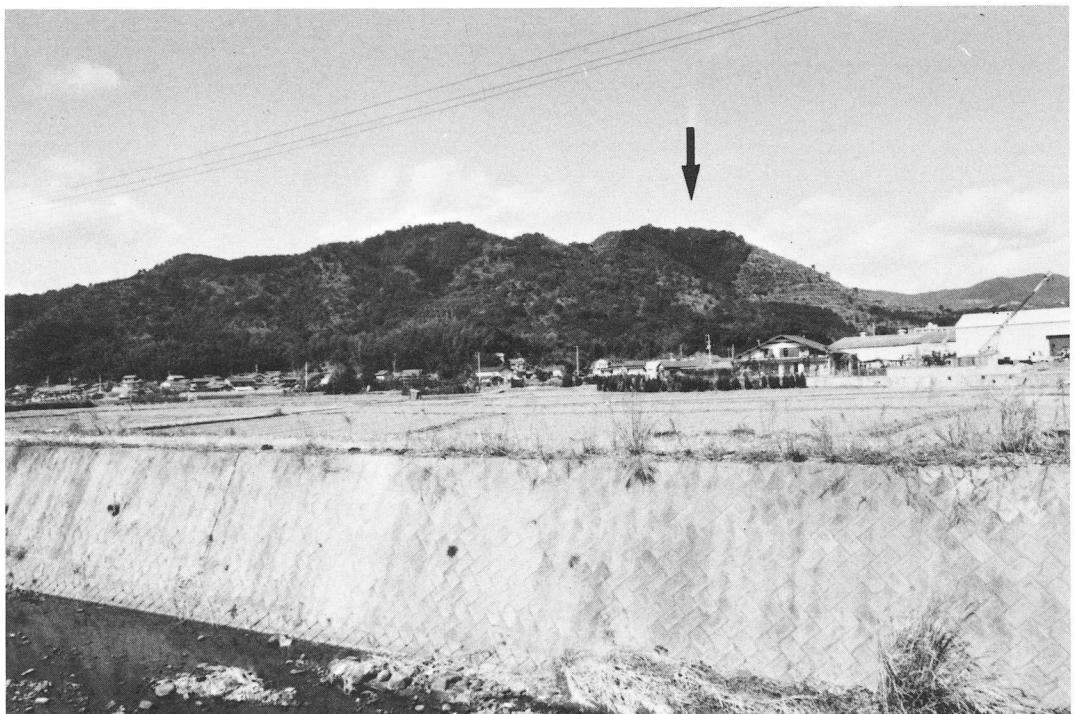




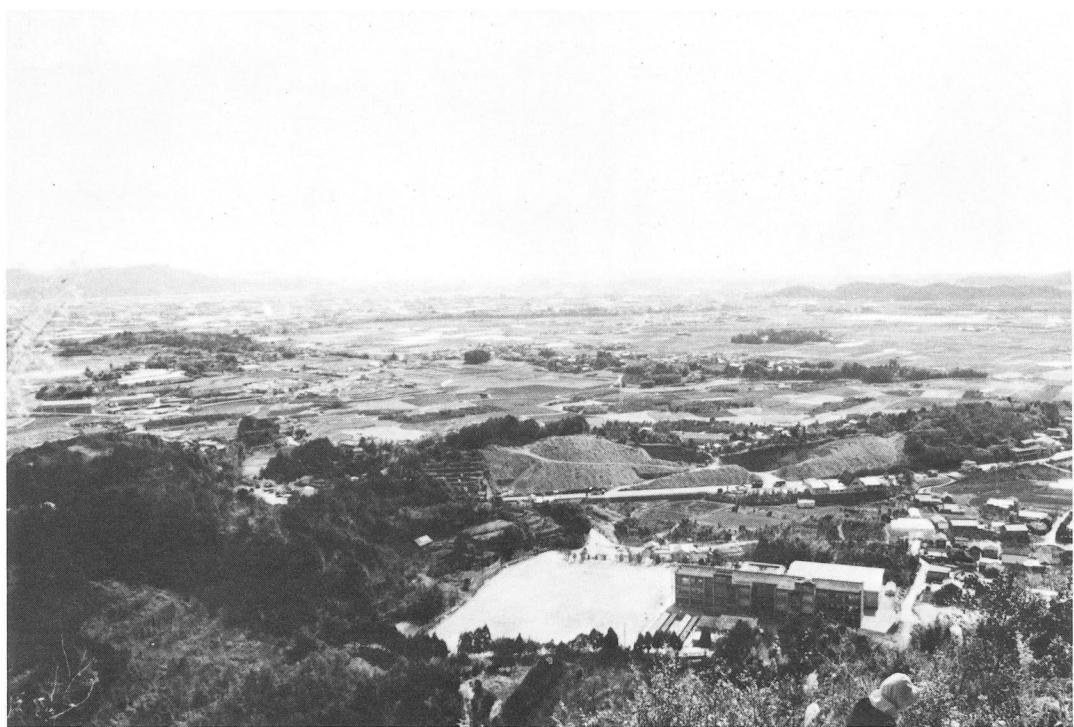
上一新 城

中一豊永土居

下一池尻古城



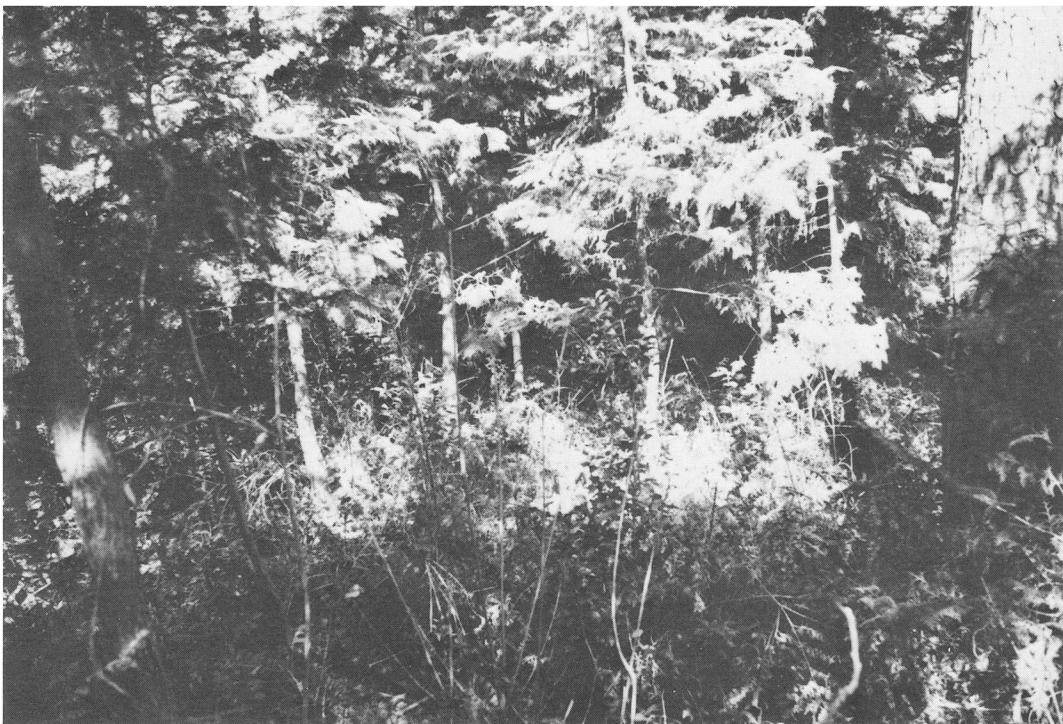
城跡と周辺（南東より）



城跡より国府地区を見る



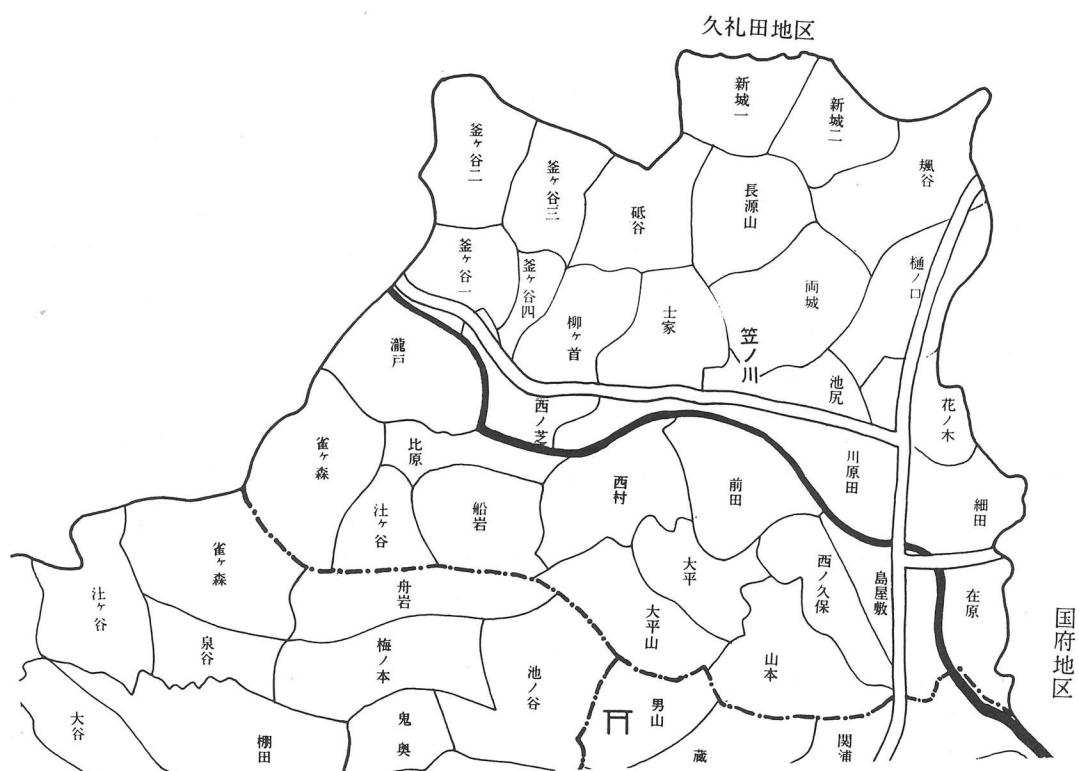
西堀切（南より）



詰（西南より）



東堀切（南より）



9. 豊永土居

岡豊笠ノ川両城 土佐山田 27.4×10.5

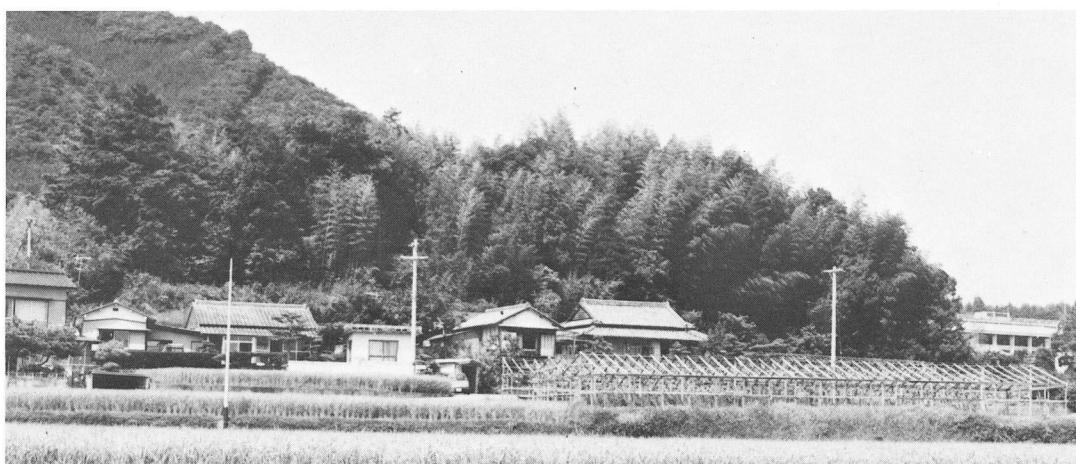
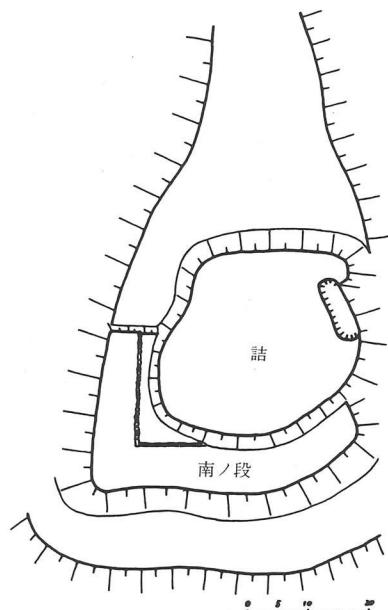
両城館（リョウジヨウヤカタ）とも言われ、岡豊新城の南麓で新城の土居とも伝えられている。標高32m程度の高さで、詰は南北30m、東西32mの方形地形であり、東北隅に10mにわたって畳状地形の残丘がある。現状は栗林である。

詰の南下方には詰とは2~2.5mのレベル差で南の段がある。幅は6~7mの帯状で、詰の南から西へと卷いている。この段が南から西へまわるコーナー部分には東西11m、南北19mにわたってLの字状の石垣があり、石垣によって囲まれた部分は南の段の平坦面より一段高くなっている。

これ以下の南斜面には数段の石垣によって構築された平坦面が続き、詰よりは5段目に八幡小社が所在する。西斜面にも同様な段状地形が残存するが、これらは後世の整地とすべきものであろう。

北方へは上方の新城に続く鞍部となつてはいるが、その窪地部分に上幅10m、下幅6m、深さ3mの箱堀状の石垣がある。かつての堀切が畠地として整地される際の石垣と考えられる。比較的平地に近く、栗林や畠地に利用されている現状から考察すれば、かなりの攪乱は覚悟しなければならない遺構である。

北の山上500mには岡豊新城があり、南西200mには池尻古城がある。



城跡全景（南より）



詰中央部（南より）



詰下北西側（北西より）



詰東土壘（南西より）



詰全景（北より）

10. 池尻古城

岡豊笠ノ川池尻 土佐山田 27.6×9.9

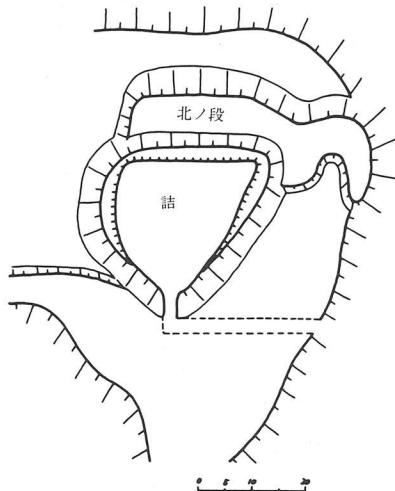
岡豊新城の南麓に所在する。標高35m程度の小丘で頂上詰は現在八幡宮の社地である。南北25m、東西幅は北端部で26m、南部で11mとやや三角状地形であり、南端が虎口状の様相を呈し開いており、現在参道として石段が築かれている。この詰部分には参道となった南端を除いて土塁が三方に所在する。東には南北方向で22m、西には南北方向に20m、北には東西方向に24mの残丘があり、敷はそれぞれ2.5m程度のものである。

詰の北下方には北の段が、詰とは3mのレベル差で存在する。幅は8mで詰の北西詰下方より22m東へのび、詰の北東隅下方では幅を6mと狭くして南へ11m東へ15m折れた釣状地形を呈している。そこから20mほど南へのびて参道に接している。

この段の北下方に幅6mの帯状平坦面や、東下方にも平坦な畠地、また南・西にもそれぞれ平坦な山林や畠地は存するが、これらは城跡との関連を考えるよりは、むしろ後世の整地を考えるのが妥当な地形ではなかろうか。

北方600mの山上には岡豊新城があり、北200mには豊永土居、南西1.3キロには谷土居などがある。

『地検帳』では古城となって、宍崎源兵衛の給地である。



城跡全景（東より）



詰（南より）



北東側土壘（南東より）

11. 三畠城

三畠神母 土佐山田 31.1×16.2

国分川と領石川の分流点の北東500m, 標高55mの山上である。現状は竹籬や墓地となり完全に消滅した城跡である。詰跡と推考される地点の下方に長さ6.3m, 上幅3m, 下幅1m程度の堀切状の窪地が認められるのみである。西方には比江山城がある。

『土佐州郡志』に「多松樹山中有城跡不知何人居城」とある。東方の香美郡にある山田氏に対する比江山城の砦であったかも知れない。(北岡博氏談)



城跡全景（西より）

12. 比江山城

比江城山 土佐山田 30.3×13.1

標高48.2mの比江丘陵の南端部に所在し、東方は国分川を隔て長岡台地をのぞみ、南には土佐国府跡、西方は左右山から岡豊城まで一望できる。

詰には比江山神社があり、東西32m、南北31mとほとんど正方形の平坦面で、北面には土壘が、また東南隅には土壘の残丘が存在する。東南隅の土壘の残丘は東西5m、南北6mのL字状地形であり、敷は6m、高さ2.5mの蒲鉾状である。北の土壘は詰の北辺全面の29mにわたるもので、北東隅が3mと最も高く、ここから西方へ20m間はほぼこの高さで続き、それ以西は1.5m程度の高さで西端に至る。東西両側面には壘状地形はなく、南にも東南隅の残丘を除いて何もない。

詰を巻くように二の段の郭がある。西方は詰とのレベル差1.5m、幅は25mで南北に60mと広い。南方はほぼ17m幅で東西65mである。東は詰と2.5mのレベル差で南端部が16m、北端部が6mで南北は52mにおよんでいる。また北は幅6.5m～9.5mで東西62mであるがむしろこの部分は南北に顕著な土壘が東西方向に存在することから郭とするよりはむしろ空堀とすべきものではなかろうか。

この土壘は北辺62mと東辺へ21mL字状にまがる土壘であり、東辺の南端部から除々に傾斜して高まり、東北隅から北辺にかけては敷は7～8m、南土壘との間隔は上幅13mであり、底幅5.7m深さ3.5mの大規模なものとなる。

二の段の下方には三の段が所在する。西面は山道を隔て僅かな比高で26m幅の平坦面があるが、この段を三の段とするにはやや困難かも知れない。南斜面は二の段とは3mのレベル差で幅4.5mの幅狭な半月状の平地が30m東にのびる。さらにその下方に12m幅の平地が30m続き、この地点で竪堀状の窪地を隔て幅を15mと広げて60m東へのびる。この郭はそこから東斜面につながりこの周辺では二の段とのレベル差も6～7mとなる。幅は16mで北方へ50m、さらに幅を20mとひろげ11m北方へのびている。この地点で1.5mの段差をもって上り、幅11mのまま西へ72mのび二の段西端を東西方向にぬける山道に接している。この北面についても空堀状地形を呈し、土壘間は上幅20m、下幅10mそして深さは4mである。こうして詰北辺の構えをみると詰に接する土壘の頂部から北へ35m区間に堀られた2本の空堀は、ともに深さが3.5～4mの大規模なものとなる。北方のなだらかな比江丘陵の防備としては当然のことかも知れない。

竪堀状の窪地は南斜面に3条存在するが、三の段を東西に画するように存在するものは上幅5.5m、底幅1mで下方30mまでは実測できる。三の段東南隅部分下方にも2条の窪地が

存在するが、それが豊堀か否かは現地形からの判断は困難である。また三の段東南隅に確認できる石垣状の遺構も城との関連は不明である。

三の段及びその下方には土取り工事の痕跡がみえ、また二の段の西方へ続く平坦地についても後世の整地が十分考えられる。

長宗我部国康・親興（比江山掃部助）の居城であり、岡豊城の東を守る城として重要な位置である。比江掃部助親興は長宗我部元親の従兄弟であるが、元親の世継問題で天正16年秋諫死した。

『地検帳』に

ヒエ山ノ大城本台 枝ノマ、
一所廿代 下山畠

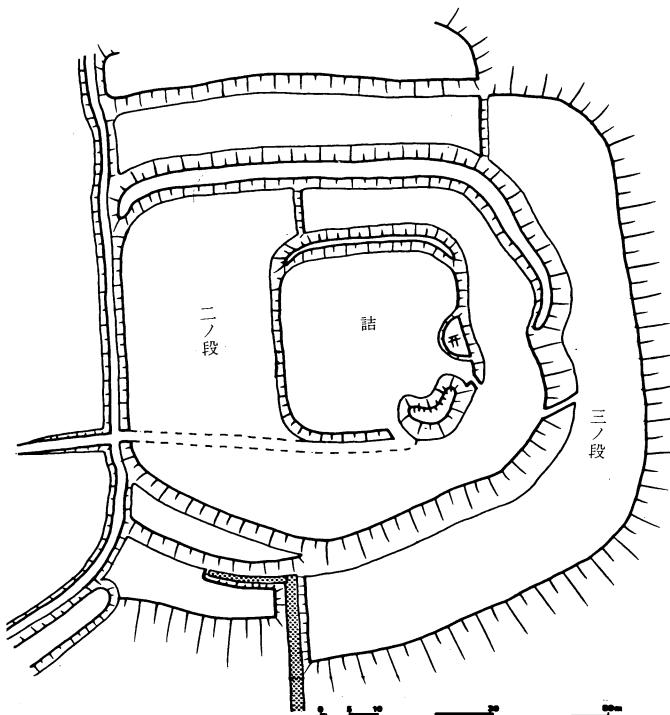
比江山 長介作
掃部助給

ヒエ山ノ古城ニノ堀四方ホリノ内
一所卅代九代二分 枝ノママ
下ヤシキ

比エ山 藤兵衛るる
掃部助給

とありこの他に、比江山大上買上跡、掃部助ニ譲 という検地数筆あり、比江山大上は国康であり父国康の居城を掃部に与えたものであろう。

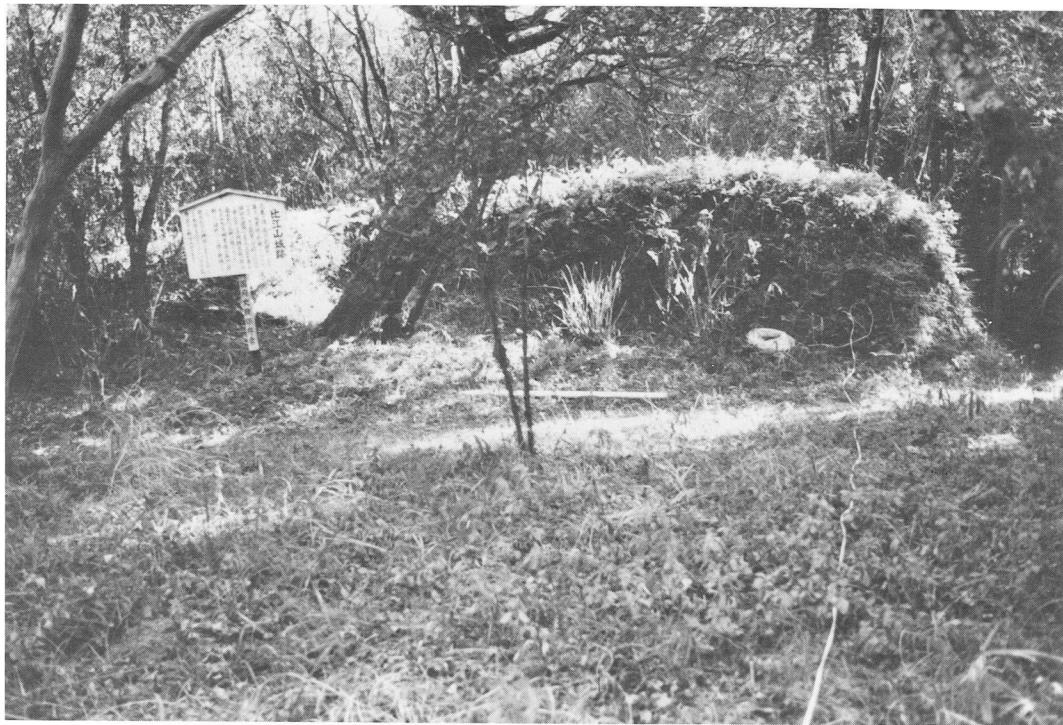
附近には、古市、南町、市ノウシロ等があり、ここには主に算所三衛門、小野、久武の給地屋敷となっており、市場の交易機能を掌握するものは、算所三衛門であろう、そして国分川を重要交易路として活用し市町が発展したと思われる。





N





詰南土壘残丘（西より）



二ノ段東端、神社の東側（南より）



三ノ段北面（南東より）



三ノ段南面の豎堀（北より）



二ノ段南面（西より）



二ノ段東北面（東より）

13. 西村土居

笠ノ川西村 土佐山田 28.1×9.0

岡豊八幡社の北麓の標高27.8m前後の畠地である。土居とは伝えられているが遺構などはない。北東800mの山上には岡豊新城、東方600mには豊永土居、西方400mには池尻古城などがある。

『地検帳』によれば西村源左衛門の給地となっている。西村源左衛門は笠ノ川で5町歩の給地と八幡宮の社領のうち、8反を扣地としている元親の有力な家臣であった。江戸時代になると葛目氏が居住したと言われる。（葛目武雄氏談）



土居石垣